



上の4冊は植草甚一のエッセイより『ぼくは散歩と雑学が好き』(ちくま文庫)、スクラップ・ブック『バードとかれの仲間たち』『マイルスとコルトレーンの日々』『コーヒー一杯のジャズ』(すべて晶文社)。下の2冊は山下洋輔のエッセイより『風雲ジャズ帖』(音楽之友社)、『ピアニストを笑え!』(新潮文庫)。

ド棚がその店の売りになる。銚子の店も——ちなみに「イーストユースト」という店名だつたんですけど、コーヒーやフードもみんなまずかつた。でも、マスターはレコード屋の息子で、若い頃からジヤズのレコードをコレクションしていたから、店には電話帳みたい

——中学生でジャズ喫茶デビューは  
だいぶ早熟ですよね。

に分厚いレコードリストがあります。そのリストからリクエストするとレコードをかけてくれるん

て、継ぐ方もいないので、閉店してしまったんですね。が、中高はほぼ毎日、二十九歳で上京してからも年間に何回か、店があるうちは通っていました。

ノクエスト制度や缶ピースのこともそれで知つたし、イーストコストは僕が本を読んで妄想していたジャズ喫茶と一ミリの誤差もありませんでした。

が、両切りのピースを吸いながら「六〇年代のマイルス（・ディヴィヴァス）だつたらなんでもいいです」とか言つて（笑）。

菊地 ジャズ喫茶といえば缶ピースだろうと。当時は今よりもずっと多くのジャズに關する文章が読め、例えば植草甚一や、のちに自分の師匠になるとは夢にも思つていなかつた山下洋輔のエツセイにも、現場のことはもちろんジャズ喫茶についても書かれていた。

「八〇年代はある意味いい時代で、フュージョンもありましたから、ジャズをおしゃれなBGMとして楽しむ都会的な遊び人と、前時代の生き残りというかジャズを左翼的に捉える全共闘上がりの人気が混在していました。粹な方はとことん粹なんですよ。すっかり腹の出た



# なぜ、ジャズ喫茶は コーヒーがまずいのか? —あるいは、修行場のパワハラとモラハラ

菊地成孔  
(音源室 立筆室)

——菊地さんの、ジャズ喫茶の原体験について教えていただけますか？

菊地 僕の地元は千葉県の銚子なのですが、町にジャズ喫茶ができたのが、おあつらえ向きにも僕が中学に入学したときなんです。だから一九七六年かな。しかもマスターが兄の同級生だったので、滑り出しとしては上々ですよ。銚子はジャズ喫茶が似合うような町ではないけれど、当時は地方にもいっぱいあって、だいたいどこの店も共通してコーヒーやフードの味は二の次で、オーディオとレコードが流れる喫茶店であり、一九六〇年代の「政治の季節」には若者たちで賑わったが、「ハードルが高い」이라는 인상이 있는가 아니겠습니까? 그곳은 어떤 문화 공간을 형성해온가요? 그곳은 어떤 문화 공간을 형성해온가요? 그곳은 어떤 문화 공간을 형성해온가요?

そこは、どんな文化空間を形成してきたのか？ そして、今日における存在意義とは？ ジャズメンの菊地成孔に、自身が若かりし頃に足しげく通った東京・四谷の「いーぐる」で話を聞いた。